

社説

電力小水力

山里の再生に普及期待

東京電力福島第1原発事故で注目を集める再生可能エネルギーの一つ、小水力発電への期待が高まっている。山里の小川や用水路を使って実用化する社会実験に、鹿児島大学と企業の研究チームが取り組んでいる。

将来、中山間地を地域分散型電力の生産基地として活性化させるのが目標で、実際に導入するための手順をマニュアル化する計画だ。脱原発の流れを、人口流出で疲弊する中山間地の再生につなげようという試みである。実験の成功を期待したい。

実験は鹿児島市の郡山、下田両町の計3カ所で行う。各所の状況によって形態は異なるが、集落を流れる水路に発電機を設置して数世帯分の電気を賄ったり、公民館や街灯に使ったりするほか、売電もする。

水の流れを利用して発電機を動かす水力発電は、資源を消費せず、廃棄物も出さないクリーンエネルギーである。産業用の電力需要が伸びたことで大容量の火力や原子力に主役の座を譲ったが、もともとは主要電源だった。中央集積と効率を重視した近代化の過程で、人口が流出し取り残された中山間地と同じように、その相対的地位を落としていた。

今回の実験で使われる小水力発電で注目されるのは、環境破壊を伴うダム式ではなく、水の流れ込みを利用する方法をとることだ。

研究チームは、中山間地には設置に適した場所はいくらでもあり、そこで生まれた電気で暮らしを賄えるなら、移り住む人が増える予想する。実現すれば、限界集落などと呼ばれ、次々に学校が閉じられる中山

間地に明るい展望が開けよう。

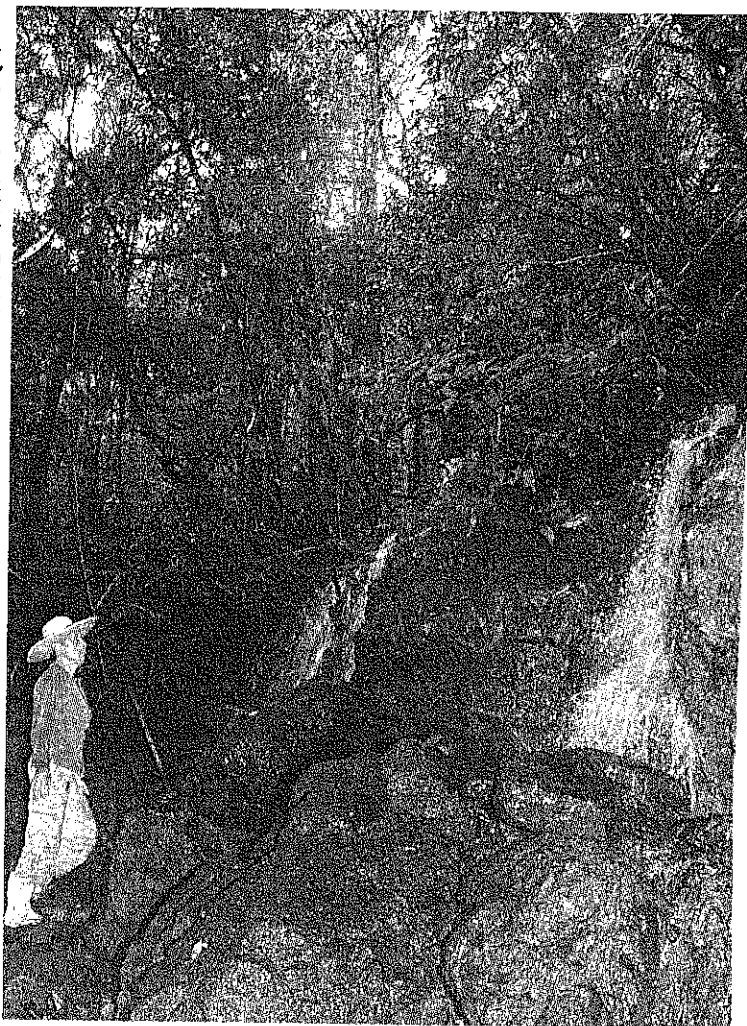
実験の中心となる同大学重点領域研究（環境学）コアプロジェクトリーダーの萩野誠教授は「これが広がれば、中山間地がエネルギーの優等地になる。社会構造が変わるほどの意味を持つと思う」と話す。

ただし発電機を設置するには、たとえ自前の水路でも、県や市、流域の水利権者などへの手続きが必要で、売電するには電力会社との細かい交渉を要する。そんな煩雑な手続きをマニュアル化し、ノウハウを提供するのも実験の大きな目的だ。

個人住宅や集落単位の電力を賄う程度の能力しかない小水力だが、自前のエネルギーが住民の地域への誇りにつながれば、活性化の大きな契機となろう。さらに設置が広がれば、総発電量で原発を代替する可能性もある。再生エネルギー特別措置法案の動向とともに目が離せない。

こんもりとした木立の中、涼やかに流れ落ちる八重の滝

鹿児島市郡山町



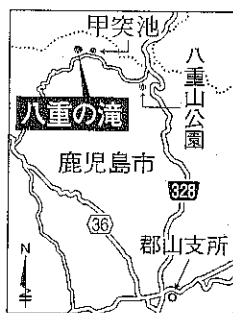
涼に誘われ 5

標高677級の八重山の中腹に、約12秒の棚田が広がる鹿児島市郡山町八重地区。気温は平地より3度ほど低く、

八重の滝

棚田や住民の生活を潤す八重山からの豊富な湧水は水温16度。避暑にはもってこいだ。40坪ほどに育った稲が揺れる棚田と山との境。用水路に架けた板の橋を渡ると、こんもりとした木立の中に滝が現れた。「八重の滝」と地元民

木立の中の「冷蔵庫」



(地域報道部・原口加奈子)

おわり

は呼ぶ。落差はおよそ5mで、白い水しぶきを上げていた。岩を伝い落ちる水に手を伸ばす。「冷たい!」。日中もほとんど日が差し込みます、辺りはひんやり。まさに天然の冷蔵庫だ。5分もたたずめば夏を忘れてしまう。たつぷり涼んで滝を後にすると、眼前には緑の棚田。心ですっと風が吹き抜けた。